最強寒波が去り、いよいよ春の到来です。本日は東洋大学附属牛久高等学校第59回卒業証書授与式を挙げるにあたり、多くのご来賓、保護者の皆様のご臨席をいただきまして、盛大にかつ厳粛に挙げるできますことは、本校にとりまして喜びとするところでございます。心より厚く御礼申し上げます。

また、保護者の皆様には、この6年間あるいは3年間、お子様とともに多くの苦難を乗り越えてこられたことと存じます。その御苦勞を思うとき、この卒業の日を迎える慶びは、如何ばかりかと、心よりお祝い申し上げます。

さて、ただいま卒業証書を授与いたしました580名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうでございます。皆さんの晴れの門出を心より祝福します。

皆さん今の顔を見ると、本校での勉強そして学校行事や部活動を通して見違えるような成長を遂げられたことを実感いたします。

世界的なコロナ禍もようやく収束して、今年度の卒業生には本校での生活の中で、ある程度コロナ以前の教育活動を進めることができたかとは思いますが、充分ではなかった部分もあります。このことは、全国の中学生・高校生が体験していることとはいえ、学校として申し訳なく思っております。特に一貫コースの卒業生は、6年間の学校生活のうち、中学校課程の学習や学校生活ではコロナ禍で翻弄されてしまいました。新型コロナによって、世界的なパンデミックがもたらされました。このことによって皮肉にもグローバル化の進展、世界は一つ、一体化していることが実感されました。

本校の教育の特色の一つにグローバル教育の展開があります。国際的な視野を広げ「地球規模で思考のできる人」の育成に力を注いできました。近年の温暖化に伴う様々な気候変動への対応、SDGs、地球環境への配慮に加えて、国際紛争への対応等々、これからの国際社会、地球全体を考えていかねばならない課題は山積しています。

国際理解、異文化理解について、中国孫子の言葉に、「彼を知り、己を知れば、百戦して危うからず」という言葉があります。戦いにおいて、敵と味方のことを熟知していれば負ける心配はないということです。戦いに限らず、異なる文化の相手との交流・交渉では、まず、「自分を知る」、広げて「自分の国のことを知る」というのは簡単なようで、なかなか難しいことです。まずは自分の拠って立つところをきちんと理解することが必要です。その上でそのことを相手に理解してもらい、相手だけでも、自分だけでもなく、お互いのことを深く知る必要があります。このようにお互いの文化にないものを受け入れたり、積極的に交流したりしていく姿勢はこれからもっと活発になるでしょう。

さて、現在の国際情勢を見れば、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、すでに3年を経過し、ロシアの兵力では足りずに、他の国の兵士が何の事情も分からず動員され、泥沼化しています。アメリカの仲介がどのような終結もたらずのか、予測ができない状況です。また、いわゆる中東地域では、イスラエルとパレスチナの紛争は1年を超え、停戦協定は結ばれましたが、アメリカがどういった形で事態の収束を進めるか、こちらも予断は許さない状況です。また、隣接するシリアやヨルダンとの関係など情勢は混沌としています。この地域の政治情勢の不安定化は、石油価格の上昇など我々の日常生活にも様々な影響を及ぼしてきます。

他の国の状況はどうでしょう。フランスやドイツ、韓国の政治情勢も混乱しています。その中で欧米の主要国等においても自分の国の利益や、自国民のことのみを最優先して、国際的な協調を避けるような風潮が強くなりつつあります。ここで改めて日本国憲法の前文を読んでみましょう。

「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつ

て、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。」

約80年前、日本は第二次世界大戦に敗れ、その反省のもと新たな憲法を作りました。日本国憲法の前文は理想にすぎるとい批判もありますが、私達は「全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成する」ようにしていかなばなりません。「自国のことのみに専念」するのではなく、わが国が「国際社会において、名誉ある地位を占め」るために、理想を求めて私たちにできることは何かを考えていくことが大切です。

幕末の思想家吉田松陰は、松下村塾を開いて、幕末の志士久坂玄瑞や高杉晋作、明治維新後近代国家づくりに活躍した山縣有朋、伊藤博文らを育てました。吉田松陰はたくさんの名言を遺しています。

夢なき者に理想なし 理想なき者に計画なし

計画なき者に実行なし 実行なき者に最高なし

故に夢なき者に成功なし

夢や理想を持つこと、そしてその夢を実現できるように努力することが必要です。さらに、

悔いるよりも今日直ちに決意して仕事を始め技術をためすべきである。

また、松陰は、

宜しく先ず一事より一日より始むべし

志を立てたならまず、一つのことから、思いついた日から始めるべきであると言っています。

何も着手に早い晚いは問題にならない。

こうしよう、これがしたいと決めたらすぐに実行することが大切である。事を始めるに年齢が早すぎる事や遅いことは関係ないと説いています。

もう一度松陰の言葉を紹介します。

夢なき者に理想なし 夢なき者に成功なし

宜しく先ず一事より 一日より始むべし

これからの社会を生き、この社会を支えていくのは、皆さん卒業生の一人一人の力にかかっています。

本校で体得したグローバル教育の成果を踏まえて、地球規模で思考のできる真の国際人となってほしいと願います。

改めて、保護者の皆様、お子様のご卒業まことにおめでとうございます。自立を始めた我が子の成長に、一抹の寂しさを覚えつつも、思わず目を細めていらっしゃるのではないのでしょうか。心からお喜び申し上げますとともに、6年間、3年間にわたり本校の教育方針をご理解いただき、ご協力いただきましたことを、本校教職員を代表して御礼申し上げます。

結びに、本日はご多用にもかかわらず、ご臨席を賜りましたご来賓の皆様方に心より感謝と御礼を申し上げますとともに、今後とも本校の教育に変わらぬご支援を賜りますことをお願い申し上げます。

2025（令和7）年3月1日

東洋大学附属牛久高等学校長 金澤利明